中高生とともに差別と闘う

『誓い』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

カレンの姉に起きた結婚差別。そのときを思い出し語るカレン。

「**カレンの本音**」の続きです。

＊

「車に乗りながら、急にお姉ちゃんが、私、二十五になったら結婚するからって。二十五の時、私は十八で、だいぶ大人になってるんだけど。

お姉ちゃん、今でも結婚しようと思えば、できる状態なの。彼氏は、親と結婚の話してる時に、その子と結婚するくらいなら出て行けって言われたみたいで。お姉ちゃんの目の前で。お姉ちゃんの彼氏は、めっちゃ結婚する気でいるみたいなんだけど、親に説得する気はないみたいで。『もういい、出て行く』みたいな。私的には、本当にお姉ちゃんには幸せになってほしいけど、駆け落ちとかしても幸せになれないって思って。

それでもお姉ちゃんは私を放って出て行かなくて。普通だったら、もう出て行ってると思う。あれだけ反対されてたら。私がやっぱりまだ小さいから、うちの親しっかりしてないし、私もお姉ちゃんがいないとダメな状態だし。いつまでもこんなだから、お姉ちゃんが出て行けないのかなって思ったりして。しっかりしたいんだけど、なかなかできなくて。

去年の人権劇も普通に見てたんだけど、あれ見てても普通に泣いてしまって。いろいろ重なって、すごく辛くって。

今年、その劇に出たけど、私の役はいろいろ重なって見えて。主人公は好きな人との子ども産めたけど、うちのお姉ちゃんは堕ろしちゃって…。あれだけうまくいけたらなって、劇見てて思って…。

…なんで結婚差別はあるんだろうなって、いっつも思う…。なんで部落の人は結婚、好きな人とできないのかなって。お互い好きだったらそれでいいじゃない。なんで部落ってだけで、そんなふうに子ども殺されなきゃいけないのかわからない。お姉ちゃんが一番辛いのに…。私は何もできないし。

私もいつか、同じようなことがあるかもしれない。みんなだって、同じことがあるかもしれない。ていうか、この中で絶対一人くらいいると思う。そりゃ、こんなこと、ない方がいいよ。みんな幸せになりたいし。でも、現実問題、あるじゃない、部落差別。結婚差別。

…他人事じゃないよ。

…全然身近にあるよ。

…部落ってだけで、人が死ぬよ…。

でも、お姉ちゃんは反対されたことにめげずに、二十五になったら結婚するって言って、今がんばって結婚資金ためてるみたい。現実問題あるけど、お姉ちゃん負けずにがんばってるから、それをみんなに知っててほしかった。…絶対他人事って思わないでほしい。

…みんな考えてよ。好きな人との子ども、普通だったらできたらうれしいよ。なのに何で産ませてもくれないし、殺されなきゃいけないのって思わない？

おかしくない？　そんなの。

なんでうちのお姉ちゃんがこんなに苦しまなきゃいけないの？

なんで結婚差別で、みんなが苦しまなきゃいけないの？

なんでそんなに簡単に命捨てられるの？

なんで部落の血は汚いの？　同じ血が流れてると思うんだけど。

今日、先生が、どうやったらなくなると思うって言ってたけど、やっぱり私から見たら、みんな他人事で見てるようにしか見えない。本当にそれでなくなると思うのかとか、本当に私らの気持ち分かるのかみたいな。お姉ちゃんの苦しみが分かるのかみたいな。

…私が今話したこと、絶対忘れないでほしい。終わります」

誓い

ミナコが応えます。

「私の母さんも、差別受けたときのことを話してくれたとき、すっごく泣いてて。あんまりそんなの、実感とか湧かなくって…。そんなの、おばあちゃんダメだって思ってたけど…。こんなに悲しいものだって分からなくって…。これは絶対おばあちゃんに言わなきゃって。今まで言えてなかったけど、言わなきゃいけないって思った」

カオリも続きます。

「ホント、こんなにたくさんの前で、よく言えたと思う。

…どこから話せばいいか…。先生とカレンが二者面談してるとき、教室でしてて。私は放課後で、勝手に耳に入ってきてて。でもそんな、子どもを堕ろしたとか、そういうところまでは聞こえなくって、反対されてるとか、そういうのしか知らなくって…。

今日、カレンが学校に来たときに泣いてて。なんで泣いてるんだろうと思って見たら、カオリが来てくれてよかったって言われて。カオリが来てくれなかったら、早退しようと思ったって言ってたけど、実際うちだって、この場で話聞くまで、何も知らなくて。実際うちはカレンに何もしてあげられなくて。だから…何かあったら、もっと頼ってほしい。何でも言ってきてほしい」

私もマイクを握りました。

「私は絶対許さない。部落差別を。絶対に。部落差別がなければ、ミナコは、おばあちゃんと厳しいせめぎ合いをする必要なんかなかったと思う。カオリにしても、お父さんとそんな話し合いをする必要もなかったと思う。カレンのお姉さんにしても、子どもの命を絶つ必要はなかったと思う。レナにしても、おばあちゃんに抱きついていくことができたと思う。本当なら。

絶対許さない、私は。みんな泣く必要なんかない。絶対泣く必要なんかない。がんばる必要もない。これ以上がんばらなくていい」

私が、心新たに誓った瞬間でした。

イラスト　中島　亜唯